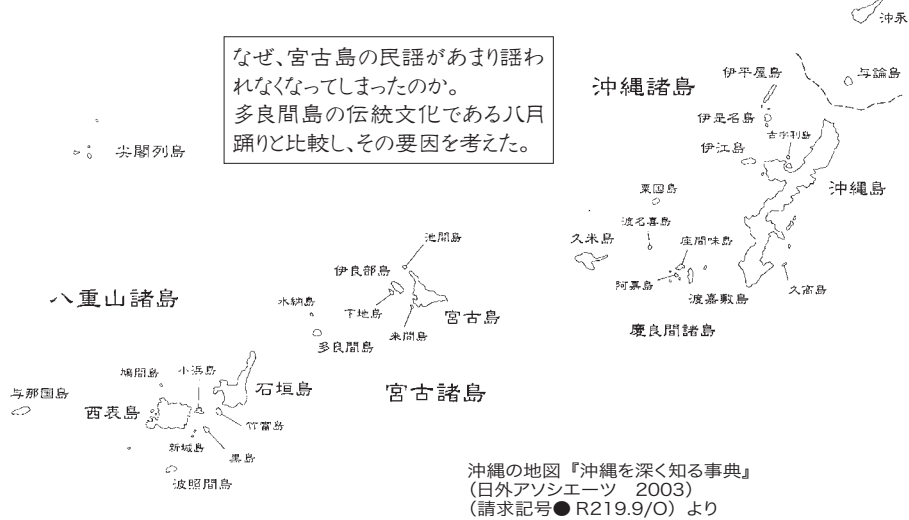


# 消えていく伝統文化 ～宮古島の民謡～

奥平 教子(音楽教育学科音楽教育専攻平成19年度卒業)

私が「消えていく伝統文化」宮古島の民謡」を卒業論文のテーマに設定した理由は、3年生のときに行ったインタビュがきっかけである。インタビュでは、祖母に宮古島で行われている伝統的な行事についての話を聞いた。そこで、沖縄の地域を守護する聖

なぜ、宮古島の民謡があまり謡われなくなってしまったのか。多良間島の伝統文化である八月踊りと比較し、その要因を考えた。



「御嶽」で豊年や健康を願う儀式が行われていることを知った。そして、その中で民謡についてこのような話があった。昔の儀礼では、地域の人々が輪になって歌っていた民謡も、今では録音された民謡を使うというものだ。このような儀礼があることを初めて

知った私は、祖母の住む宮古島についての知識が何もないことを恥ずかしく感じた。そして、祖母が話をした後の「昔ながらのものがなくなってしまうのは、悲しい。なくしてはいけないものだと思うのだけれど」という言葉に共感し、卒業論文のテーマを設定した。そこで論文では、宮古島や民謡の歴史から、時代の流れと民謡が伝承されなくなった理由との間にあるような関係があるのか考えた。また、先島諸島に存在する伝統文化と宮古島の民謡とを比較し、今も受け継がれている伝統文化とそうでないものの違いについて論じていく。

## 歴史から見る民謡の発生

宮古、八重山の人頭税の重課や検地、開拓事業が強力に推進されるようになったのは1609年の薩摩による琉球入り後である。薩摩は王府に財源を求めていくという図式である。人頭税の始まった1637年から、廃止になった1903年までの270年間、島の人々はこの悪税に苦しめられることになるのである。そして、薩摩入り後の世相を反映して、生活

## 民謡について

の苦しみを歌で表現するようになってくる。これが民謡の発生だとされている。

宮古島の民謡は現在、呪詞・呪禱の歌謡、叙事的歌謡、抒情的歌謡の3つに分類されている。

呪詞・呪禱の歌謡はそれを唱え、謡うことにより凶をはらい、吉を招くという一種の言霊信仰に支えられていて、歌謡の先行形態として位置づけられている。呪詞的歌謡は「唱えもの」とも呼ばれ歌謡のように歌詞と曲とが結びついて旋律化していないのが特徴である。また「唱えもの」は明るい面を表現する「ニガリ」と暗い面を表現する「デーユン」に分けることができる。そして、呪禱的歌謡は旋律化されており「謡いもの」とも呼ばれ、呪詞的歌謡と区別されている。

次に、叙事的歌謡とは村落の英雄にたい、力のある英雄の事績・事件・事柄の発端から事の成就の過程を、個人の感情を交えず、対句・対語を用い、進行形で集団的に謡ったものである。そして、叙事的歌謡には「アীগ」と「クイ

チャー」がある。「アーグ」の語源は「綾言」で、綾なる言葉、美しい言葉であり言霊思想に基づく「聖なることば」を意味するものであると考えられている。「クイチャー」の語義は「クイ（声）」を「チャース（合わせる）」である。ここから生活の場での集団的

歌謡という特徴が見えてくる。抒情的歌謡には「トীগアニ」や「シュンカ」がある。呪禱的歌謡や叙事的歌謡までは対句・対語を繰り返した長詩形の歌謡であるが、この二つは、いずれも短詩形を連ねた個人の感情を謡った不定形の歌謡である。呪禱的歌謡と叙事的歌謡の抒情的な部分を受け継いで生活の場で発展したものが、抒情的歌謡と考えられている。「トীগアニ」の語義はすばらしい絹糸の音色を意味する「イチユニ（糸音）」の対語「トীগアニ（唐の音）」である。「シュンカ」は多良間島だけで語われているものである。その語義は「しようがない」という諦めの気持ち吐き出したものである。任務を終えて離島する役人、その旅先での妻との離別の悲しみを謡ったものである。

## 八月踊りと比較して

「八月踊り」は昭和51年5月に国の重要無形民俗文化財に指定された。八月踊りの時期は島を離れた人々も里に帰り、それに文化財調査の関係者や観光客などがこの祭りに合わせて島を訪れ、にぎわいをみせる。宮古島の謡われなくなった民謡と、島をあげての行事になった「八月踊り」を比べることで、そこから民謡が受け継がれなくなつた要因を考察していく。

八月踊りの発生は民謡と同様に島民たちがその頃に課せられた厳しい人頭税の苦しみから解放され、慰めあうための手段であつたとされている。成り立ちの理由が同じにもかかわらず、今も盛んに行われているものと、そうでないものとの違いはどこにあるのだろうか。それは時代の流れに沿って、その伝統文化がどう形をかえてきたのかに関係しているのではないかと考えた。「八月踊り」は明治の初期から中期になつて「古典踊り」や「組踊り」が首里を中心に沖縄本島から伝承されたようである。つまり、元来の「八月踊り」と沖縄本島の「組踊り」、この二つ

が融合され現在の「八月踊り」となつたのである。洗練された芸能が融合されたことにより、「八月踊り」は観客の存在を意識した芸能へと発展を遂げたのではないかと考える。このことが、現在でも島を賑わすほど活気を持ち、伝承され続けている要因ではないだろうか。もちろん、伝承されてきた要因はそれだけではない。島民の共同体の連帯意識が根強く残っていることなども言われている。けれど、沖縄本島の「組踊り」が伝わってきたということも、「八月踊り」の存続の要因の一つではないかと考えた。

ここで、宮古島の民謡との違いを見ることが出来る。民謡は、島民の想いや願いを謡い込んだものであり、それを聞いて楽しむものではない。民謡は謡うことによつて苦しみを発散し、謡うことによつて明日への活力を見出すことができる。つまり、一人が謡い一人が聴くという構図ではなく、二人で共に謡うという構図になるのである。共に謡うということは、観客の存在を意識しない。そして、時代の流れとともに島民の想いや願いが少しずつ変わり、民謡で謡

われている歌詞の内容との間に違いが生じ、あまり謡われなくなつてしまつたのではないかと考えた。卒業論文を通して宮古島の民謡についてを全てとは言えないまでも以前よりは知ることができたと思います。これから、ここで得た知識を何らかの形で役立てて行けたらと考えています。

### 参考文献

- 仲宗根将二『宮古風土記 上巻』ひびき社 1997
- 仲宗根将二『宮古風土記 下巻』ひびき社 1997
- ※図書館には1998年出版S195-779を所蔵しています。
- 日本放送協会編『日本民謡大観（沖縄 奄美）宮古諸島篇』（日本放送出版協会 1990）（請求記号：E16328）
- 新里幸昭『宮古の歌謡』（沖縄タイムス社 2003）（請求記号：J98-842）
- 『多良間島の八月踊り』（多良間村市役場 1993）（請求記号：C58-179）
- 渡久山春央『宮古あやぐこ人頭税』（くしん印刷 2000）
- 仲間井佐六『多良間村』（近代情報 1983）
- 『宮古の歴史と文化を歩く』（沖縄県歴史教育者協議会宮古支部 2006）
- 平良重信『聲楽謡附宮古民謡十二曲』（重信時計店 2001）
- 『郷土の音楽』（沖縄県教育委員会 1981）